

第5回 府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議（概要）

1 日 時

令和3年9月29日（水）午前10時～午後0時10分

2 場 所

京都産業大学むすびわざ館 3-A（3階）

3 出席者

- 委員 10名（欠席なし）
- 教育委員会 橋本教育長、木上教育次長、山本教育監、大路管理部長、吉村指導部長、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、平野管理課長、村田高校教育課長、坂田高校改革推進室参事 ほか

4 概 要

- 事務局からの資料説明および質疑応答
- 協議

◆：座長 ○：委員 □：教育委員会

■事務局からの資料説明

■質疑応答

- 普通教育を主とする学科の改正で、普通科、学際領域に関する学科、地域社会に関する学科などがあるが、これは入学選抜の段階で学科を選んで志願するのか、入学してから学科を選ぶ形になるのか、今分かっている範囲でかまわないので教えていただきたい。
- おそらくは学科ごとに募集をしていくことになるのではないかと思うが、制度の詳細についてはまだ決まっていない状況である。
- 「類・類型」と説明にあったが、「類」と「類型」は何が違うのか。
- まず「類」というのが、「第Ⅰ類・第Ⅱ類・第Ⅲ類」といった区分。「類型」というのが、その中に置いている「人文系・理数系」といった、いわゆる系統のことである。
- 最近「STEM教育」という話を聞くことがあったが、この検討会議でも「STEM」ということを視野に入れていくのかどうか。
- 学科とは別に、学び方や教科横断した学びといった教育内容の面に関わってくるものであると思う。その点についても、協議④等において、高等機関との連携やグローバル人材の育成とい

った視点から御意見をいただきたい。

■協議（主な意見）

- 府北部地域では、普通科、普通科系専門学科、職業系の学科3つの配置バランスが、一定取れていると思う。5市2町において、おおむね1市町に1校の普通科が設置されている状況である。この前のアンケートでも、「自宅に近い、通いやすいところに高校がある」ということが重要だという結果が出ており、普通科を中心とする高校が存在することに意味があると思う。普通科系専門学科は、京丹後・舞鶴・福知山に設置されている。少し距離があり、電車等を通う必要はあるかもしれないが、丹後・中丹地域の中で、京都市から離れていても先進的な学びを受けられる選択肢があることは、望ましいと思う。一方で、職業系の学科に関しては、同じ市の中に設置校が複数あるなど、丹後・中丹地域には多く集中していると思う。これに関しては、今後人口が減少していく中で、その機能などの在り方を議論すべきではないかと思った。

- 普通教育を主とする学科の在り方としては、今後は地域社会と連携をした、探究型の教育に力を入れていく必要があるのではないかと思う。また、普通科系専門学科では、進学希望の生徒が多いという府立高校の実態を考慮すると、高大接続に力を入れるべきである。WWLコンソーシアム推進事業においても先取り履修の話をしている。高校の学びがいわゆる5教科中心であるのに対して、大学の学びは「〇〇学」という学習領域であるため、そのあたりが大学入試で接続できていない大きな要因である。大学の学びというものを意識した先取り履修も含め、高大連携により力を入れていくべきだと思う。職業学科については、リベラルアーツ的な学びやインターンシップ、問題解決学習をさらに深めながら、地域と連携した職業教育という形を、より模索していく必要があると思う。

- 「普通科」を英訳すると「ノーマル」となると思うが、京都府ならではの「ノーマル」から「ニューノーマル」、あるいは「シン・ノーマル」な府立高校の在り方というものを、議論すべき時期なのだろうと思う。

- 北部地域は特に人口減少が著しく、向こう20、30年は減少傾向が止まらないということを前提としながら、新たなチャレンジを検討する必要があると思う。京都府の北部在住の生徒だけを対象に学校の在り方を考えているのは、縮小均衡の議論にしかないのでは、例えば一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームが行っている「地域みらい留学」という仕組みを参考に検討してはどうか。この約10年間で、全国の生徒たちが地域を飛び出して国内留学で学んでいくという取組が進んでいる。他府県の生徒が、3年間全てを京都で学ぶということは、寮の整備など課題も多いと思うが、例えば高校2年生の頃に、京都市内の高校生が1年間北部地域の高校に留学をするようなことが考えられる。大学での、関東と関西の学校間や海外留学と同じような発想である。そのような人材の流動化について、魅力を高めるような仕組みも考え

られるのではないか。それは、探究活動や部活動をキーにするのもよいと思う。例えば、北部地域の高校で実績を上げている運動部活動などである。これによって、生徒たちが自分の地域というものを相対的に見る、または新たな人材との交流によって、さまざまな多様性が担保でき、留学先で得た経験を自分の地域に持って帰ってもらうことにも繋がる。初めから全国にまで広げる必要はないが、例えば京都市内と北部地域との連携によって、京都市内の高校生たちが北部地域や海の京都・森の京都を知るという取組は、考えていく余地があるのではないかと思う。

○全国的に見て、府立高校では普通科が充実しており、定時制も多く設置されているが、通信制で学べる学校は非常に少ない。このような状況にあって、中丹地域では定員割れに苦しむ高校も出てきている。一方で、私立の広域通信制の高校が非常に注目を集めており、そういった選択肢の中から他地域の高校を第1志望とする京都府の中学生が増えているのではないか。コロナ禍で教育のオンライン化が進み、そのメリットが明らかになった一方で、オンラインだけでは人間関係が構築できないという課題も出てきた。先般のアンケート結果でも、部活動という切り口で高校選択をしている生徒が非常に多かった。今求められている通信教育の在り方というものは、オンラインとリアルハイブリッドであると思う。例えば、いわゆる受身的なティーチング中心の学びは自分のペースで学習できるオンラインを活用し、部活動や探究的なグループラーニングといったことはリアルで行うというような仕組みである。このような新たな通信教育の在り方やオンライン教育の在り方というものを検討すべきである。そうすると、京都府内全域で生徒数は減っていくが、全国から京都の高校を選べるという選択肢も提供できると思う。新しい時代の学びのスタイルとして、オンラインとリアルハイブリッド、あるいはハイフレックスの要素を入れたような新たな京都モデルを構築すべきである。その取組の中で、情報系の大学との連携や、部活動での中高連携といったことも考えられるのではないか。

○京都府では、昭和60年度の高校制度改革で普通科に類・類型を設置し、普通科という枠組みの中で特色を出してきた。その後時代の変化やニーズに合わせて、入学後にコースを選択するという現在の形に変化してきた。平成4年の京都府の高校教育検討委員会の答申を受けて、新しいタイプの専門学科として平成8年度に京都こすもす科が嵯峨野高校に設置され、その後山城高校の文理総合科など、普通科系専門学科が設置されていった。これらの学科は、教育内容に特色があるだけでなく、入学者選抜においても、府内全域から受検が可能であるため、学校独自の検査問題によって選抜しているという状況もある。そういった点で、普通科とは一線を画しているという状況である。

○府立高校には現在、普通科と普通科系の専門学科があり、新しく示された普通教育を主とする学科をどう位置づけるかという点が課題だと思う。入学者選抜において、普通科系専門学科は前期選抜で定員の100%を決定することになっており、倍率によって、不合格になる生徒も多

くなる。その不合格となった受検生の大半が、次の中期選抜で同じ高校の普通科を志願するという実態がある。このような状況から、生徒・保護者の志願傾向が、学科ではなくて学校の選択になっていると思う。国において、普通科の見直しが昭和23年以来初めて行われ、3つの新しい学科の方向性が示されたが、京都府における普通科改革としては、普通科系専門学科と普通科の整理を考えるべきであると思う。新たな京都モデルというのは、国の方向性とは少し違う形で、これまでの京都府独自の経過を踏まえて検討する必要があると思う。

○普通教育を主とする学科の「新普通科」とも呼ばれている学科について、独自の経過がある京都府立高校の中で設置するのかどうかという論点では、設置する必要が必ずしもあるとは思わない。京都府は既に普通科系専門学科が全国平均4.1%に対して9.2%と、全国平均の2倍設置されており、会議資料での普通科系専門学科の特色を見ても、大学や地域と連携する中で各高校の特色を打ち出している学校が既にたくさんある。そういう現状を考えると、新普通科の方向性である学際領域や地域領域といった内容が、府立高校では既に普通科系専門学科という枠組みの中で設置している。多少制度的な違いはあるにしても、既存の学科と似た内容や名称の新普通科を設置しても、保護者や生徒のニーズはどれだけあるのか、生徒が集まるのかという疑問がある。

○先日、京都八幡高校と北桑田高校を訪問した。京都八幡高校では、さまざまな困難を抱えている生徒に対して、1人1人のニーズに応じた非常にきめ細やかな個別指導をされている。社会で自立して生きていくためのモチベーションや学力を生徒に身につけさせることは、単にその生徒が進学できるか就職できるかといった進路の面だけではなく、その生徒が社会に出て働いて納税者になる、それで社会を安定させていくという福祉的な視点からも重要である。そのような視点において、公立高校としての社会的役割・存在価値や意義を感じることができた。

○先生方が尽力され、きめ細やかに指導をしても、さまざまな理由から中退してしまう生徒も少なからずいるといった実態があると聞いた。生徒が定時制を希望する中でも、保護者の強い意向や勧めによって最終的に全日制普通科を受検するというケースもあるように聞いた。今大半の高校で、履修単位数は国が定めている基準よりも多いそうだが、履修単位数を国が定める基準のギリギリまで減らすことで、社会に出るまでの基礎的な資質・能力を各自のペースでゆっくりと身につけられる、定時制的な普通科の新しい仕組みが非常に有効であると思う。よりきめ細やかな指導もでき、他の一般的な普通科では授業についていけないと感じているが、やはり普通科で学びたいという生徒をターゲットにした高校が求められていると思う。

○先日テレビ番組で、中退者が多い定時制高校が、中退に至る要因を学校に登校できないことと捉えて、出席日数の規定を変え、オンライン補習の出席や課題提出でも単位を認めることにしたという他府県の事例が紹介されていたので、それを参考にすることもできるように思う。府

立高校の普通科でも中退者はいると思うが、出席日数の規定は結構厳しいのではないかと。成績が良くても学校に来ていなければ卒業できないというイメージがあるが、高校は義務教育ではなく、単位を取得することで卒業認定がされる教育機関である。3年間1日も来ていないというのは無理だが、オンライン補習への参加や課題提出によって一定の学力修得が認められ、出席日数の規定を多少緩和することができれば、学校に毎日来るのは難しい、他の生徒と同じペースで学ぶのは難しいが普通科高校を卒業したいといった生徒のニーズに応えることができるのではないかと。国が新たに打ち出した普通教育を主とする学科を設けなくても、生徒の多様性に応える新しい普通科の魅力を、京都モデルとして打ち出せると思った。

○北桑田高校は、普通科と職業学科が併置されており、単位認定まではしていないが、職業学科の生徒が教えてあげながら普通科の生徒と一緒に林業の実習をするなど、双方の学科の内容理解を深める活動を積極的に行われていると聞いた。また、職業学科で普通科と同じ教科書を使用することで、職業学科の生徒も大学進学を目指すなど、生徒が幅広い資質能力を身につけることを可能としていた。そして、地域と学校とが「ウィン＝ウィン」の関係になっていることも印象的だった。新しい学習指導要領では、社会に開かれた教育課程という理念が打ち出されているが、一方通行の関係になりがちであると思う。しかし、この学校では、学校の教育方針を地域の方に共感してもらうことで施設整備の協力を得たり、学校は整備した施設の開放やスポーツ教室などで地域に還元したりという、地域と学校がお互いに高め合っていく関係性を構築されていた。生徒募集では厳しい状況であっても、地域に必要とされている学校であると感じた。府立高校には他にも、普通科と職業学科が併置されている高校が多くあり、先般のアンケートで明らかになったように、それぞれの学科の特色を重視して入学している生徒が多い。もちろんそれを生かす必要があるが、普通科と職業学科の生徒が同じ場所で学んでいることをメリットとして、互いに交流してお互いの学習内容の理解を深めたり、部分的に共通の目標を掲げたりということは、大きな特色になると思う。普通科は進学、職業学科は就職と、画一的に分けるのではなく、進学と就職両方の可能性が両学科の生徒に開けることが、府立高校ならではの魅力を増す上で重要であると思った。

○北桑田高校に訪問したが、生徒募集において地域の理解や協力を得て、一緒に動き出したという話が印象的だった。「学校をオープンにする」、「社会に開かれた学校」とった視点で、テレビやSNSなどのメディアを使ってのアピールや、地域との連携など、早くから取り組んでいることを知った。少子化なども見据えて、先を読んでしっかり手を打たれたことは本当に素晴らしいことである。他の学校でも、地域との連携を通して意見が交わされる中で、さまざまな知恵が生まれているのではないかと。

○保護者としては、安心・安定の志向から「普通」を勧める傾向があり、それが普通科志向にも繋がっているのではないかと。新設された学際領域に関する学科と地域社会に関する学科

の目的である、社会的・国際的に学ぶということと、地域に根ざした部分で自分にできることは何かと考えていく視点というのは、両方とも大事であると感じた。地域社会という観点では、小学校から地域と密着した「ふるさと学習」などを続けているので、繋がりやすい視点なのかなと思う。一方で、SDGsの実現やSociety5.0の到来に伴う諸課題に対応する学際領域という観点は、発展的な部分というか、地域社会の課題等を通して考えていくという部分があると思う。この2つの学科が横並びとなった場合に、中学生はどれだけ選ぶのかなと感じる。だから、入学後に、学びが発展していく過程で学科やコースなどが選択できるという仕組みや、学科間で交流し合える場などがあれば、共通の理解やメリットが生まれてくると思う。

○他府県では、総合学科で知的障害のある生徒を受け入れるコースがある高校や、さまざまな課題・困難を抱える生徒を受け入れることをミッションにして地域と密着している高校、進学に向けた指導に重点を置いている高校など、学校の育てたい生徒像にそれぞれ特色がある。一方で、京都府では普通科が多く、地理的な諸条件の違いがあっても均一的に教育を受けることができる環境を整備してきたのだと感じた。中学生1人1人が、高校進学の際に将来の自分の進路を考えながら、それに応じた教育内容を学習できる学科を選べる、高校の魅力や特色を知って選べる、そういう魅力づくり・特色づくりが、今後の府立高校改革の中では必要であると思う。京都府ならではの海や森・林に関する学びの特色や、他県には無い部活動の特色などを生かし、人口減少を見据えて、他県からも志願できるような学校づくりがあってもよいと思う。

○府立高校ならではの魅力・特色づくりの視点では、不登校や対人関係など課題を抱える生徒たちがより柔軟に学べるように、定時制や通信制を併修するような新たなシステムがあってもよいと考える。また、職業系専門学科に関しては、府立大学の生命環境学部で森林科学科・農業生命科学科などが設置されており、京都府ならではの農林業分野での高大連携も考えられるのではないかと。また、工業学科からの高等教育機関への進学など、府内の大学・学部などと連携した進学のシステムなどもあればよいと考える。

○普通科系専門学科や普通科の改革を考える際に、中学生や保護者はどういう視点で高校を選んでいるのかを考えてみると、通いやすい地域にあることや、やりたい部活動が盛んであるなどの要素も多いと思う。子どもたちの多様なニーズに合わせる形でさまざまな専門学科が設置され、進路選択の幅が広がってきたと思う。専門学科であれば通学圏を越えた学校も選択できるので、生徒の視野を広げられるようになった。一方で、普通科系専門学科が非常に多くなってきたとは言える。また選抜制度も、前期・中期・後期の中で、例えば募集割合が学校によって違うなど、非常に複雑になってきている。中学校の進路指導においては、選抜を見据えながら、生徒の希望を聞き、学力や適性を踏まえて希望とは異なる方向を示してやらなければならない場面もある。普通科系専門学科という選択肢が増えてきたが、中学校段階での生徒

のさまざまな背景や幅広い志望動機などを踏まえると、多様な生徒が学べる普通科の存在意義は大きいと思う。各地域で生徒たちが生き生きと学べるような普通科について、選抜制度も含めて総合的に検討していくべきであると思う。

- 中学生の時点で将来の目標をはっきり持っている生徒もいるが、多くの生徒や保護者には、高校に入学してからしっかりと自分を見つめようという傾向がある。これだけ高校や学科がたくさんある中で、中学生の時点で自分の能力や適性と照らして自分に合った進路を決めていくというのは、本当に難しいことだと思う。学科等が複雑化していくことは、進路指導を行う中学校側にとっても困難が生じると思われ、普通科系専門学科や普通科の内容や目的など、中学生や保護者にとって分かりやすいものであるべきだと思う。
- 普通科の見直しが、昭和23年以来の改革ということで、大きな変化の節目に来ていると改めて感じた。地域創生の視点と高等学校との繋がりにおいては、小・中学校も含めて学校には、地域コミュニティの核となる役割があると思う。学校というものは、地域の人々を繋ぎ、地域の絆もつくり、そして地域の未来をつくっていくという大きな役割があると思う。コロナ禍も含めて将来を生きていく子どもたちに、地域社会を守っていくような力をつけていくような資質・能力を、これからの時代の教育ではぐくんでいかなければならないと思う。
- 全国で、学校を中心に地域のいろいろな力を結集して取組をしている事例がたくさんある。学校を核にした地域活性化プランの中で、ひと・仕事・街づくりを行っているという取組もある。いろいろな高校の活動内容を見てみると、いくつか共通点が見えてきた。地域社会が抱える諸課題に対応していくという視点では、推進協議会のような組織を設置している高校や、行政・市役所などが組織的に関わって支援している高校、高校の先生と地域住民で「学校の未来を語る会」といった組織を設置している高校などがあつた。高校生を主人公とした、地域創生のためにつくられている組織があることが、1つの条件ではないかと思う。高校生が地域の人と交流していくことの教育的な意義は大きく、これからの地域社会を支えていく高校生たちにとって大切なことだと思う。
- 普通教育を主とする新しい学科の設置についてだが、現在の普通科には、大学進学を見据えている生徒が多いのではないかと思う。新しい学びの視点の大切さは教育関係者には理解できるが、果たしてそれが大学進学などのニーズにどう繋がっていくのかということを生徒や保護者に浸透させていくことは、簡単ではないと思う。その課題をクリアすることを抜きにしては難しいと思う。
- 普通科改革に限らず、新しい取組を導入していく時には、大きなマンパワーが必要だと思う。新しい学科の設置条件には、「連絡調整等を行う職員配置等の措置を講じる」とあり、新たな

取組をしていこうとすると、通常の授業を担当している先生や現在でも多くの仕事を抱えている管理職では無理があるといった課題がある。新しい普通科という新しい取組においては、それに特化するマンパワーの配置が必要だと思う。

○新設された学際領域に関する学科と地域社会に関する学科の目的は、両方とも非常に大切な内容であると思う。日本社会においては、少子化と都市部への人口の一極集中が進んでいる。地方であれば、ゆったりと生活でき、子どもを産み育てられるといった発想もあると考えられるが、仕事は都会に行かなければ無いというようなことでは、やはり状況は変わらないと思う。そのような中、生徒たちが地域や社会に関する課題を捉えて、地域のことを知って、地域に自分がどのように関わるかなどについて学べる環境をつくることは、良いことだと思う。

○中学生段階で将来の目標を持って高校選択ができればよいが、漠然としている子が大多数であるかと思うので、そのときの自分の状況に合わせて高校を選択していると思う。公立の魅力として、どの高校を選んだとしても、各校の取組成果や良い部分を、府立高校全体で共有できるようなシステムがあれば、素晴らしい環境になると思う。学校は、小・中・高と継続して学力を身につける場であるが、さまざまな才能を持った生徒たちが将来に向かっていろいろなものを吸収していく場でもあると思う。

○高校や大学、高専などを卒業して、企業に就職したり、家業を継いだりという形で社会に出ていくといった一般的な流れにおいて、職業の面でいうと、文系といわれる人たちは、科目を広く勉強している方が比較的多くの場面で適応しやすいという感覚を持っている。一方、理数系といわれる人たちは、理数科目に特化して学んでいても自信をもってやっていけるという感覚を持っている。そういった視点で考えてみると、バランスの取れた普通科というものの存在意義は大きいと思う。

○京都府には、府立高校があり、京都市立高校があり、私立高校がある。少子化といわれる中で、それぞれが生徒を募集していくこととなる。市立高校や私立高校を含めて、どの地域にどのような高校があって、どのような特色を出しているのか、その中での府立高校の在り方とはというふうに考えないと、府立高校だけの議論にとどまってしまう。

○将来を見据えて自分はどうなりたいかというのは、中学生段階では漠然としているものである。そういう点からすると、選択肢は少ないよりも多い方がよいと思うが、情報が多すぎるというのも問題である。カテゴリー化をして見せる工夫や十分に伝える努力が必要であると思う。

◆府立高校においては、普通科系専門学科の多さが、今後の展望のヒントになると思う。普通教

育を主とする学科に新設された学際領域や地域社会に関わる観点については、府立高校では普通科系専門学科の中に取り込んで展開できるような気がする。普通科系専門学科で今行っているさまざまな取組によって、いろいろな工夫ができると思う。そのキーワードとなってくるのが、「地域」、「課題解決型の探究」、「多様性への対応」、「ICTの活用」、「シン・ノーマル」などといった要素である。

- 職業学科への進学希望動向は、日本の産業の動向を反映する傾向があると思う。職業学科に入学した生徒が、一生懸命勉強をして何かを身につけていく中で、必ずしもそれが将来の職業に直結しなくてもよいと思う。高校生活において、何かしらの成功体験、何かを「創り出した」という体験をさせてあげることが大切である。
- 情報系というのは先進的分野であるため、移り変わりが非常に速い分野であると思う。工業系分野の層を厚くして、生徒に技術力を磨かせる、職業に関わるノウハウを身につけさせるというのが、将来的には有効ではないかと考えている。
- 京都府では過去から、普通教育を希望する生徒も、職業教育を希望する生徒も、同様に高校に進学して勉強するというような総合性のもとで、多くの学校に普通科と職業に関する学科が併置されていたという状況がある。中学生の普通科志向の強さもあって、その後職業学科の募集停止等をしてきた学校がある。その結果、現在では京都府の各地域に、それぞれ地域産業を踏まえた特徴的な農業科、工業科、商業科などが残っているという状況になっている。これらの学校を見ていると、それぞれ地域や大学・企業等と連携して、地域社会に貢献するような教育を実践されている。そのような特徴的な職業学科は、今後も引き続き充実を図っていくべきだと考えている。
- 職業学科を持つ高校は南部・北部ともに多くあり、高大連携が進んできている部分もある。また、専門職大学ができるなど、専門性を持った職業人材育成ということのニーズが高まっていると思う。普通科や普通科系専門学科の生徒たちと職業教育を受けた生徒たちが共同して学ぶような仕掛けをすることが、府立高校全体としての魅力アップに繋がると思う。
- 学校の中だけで連携をして学ぶという学び方だけではなく、例えば週に1回実際に企業に行く、長期間企業に飛び込んでいくというような大胆なプログラムを、府立高校でも検討してみればよいのではないか。他府県の公立大学では、平均卒業年数が5.5年であり、大学は4年、高校・中学校は3年といった固定概念があっても、学びたい学生が学べる環境をつくれれば、それ以上の年限も受け入れられているということである。これまでの標準を見直していくという議論の中で、特に職業学科はプログラムやメニューも多いので、高校3年間を越えた学びといった考え方もあるのではないか。

- 職業教育・キャリア教育というのは、職業学科を持つ学校のみならず、普通科にも普通科系専門学科にも必要な、普遍的な要素であると思う。府北部で行われた調査によると、将来的に北部に帰りたいと思う学生は、地域にどんな企業があるかを知っている学生であるという結果であった。Uターンにおける就職先の選択肢が、役所と銀行くらいしかないと考えている学生や保護者が非常に多いといった背景があるのだと思う。中学生・高校生のうちに、地域にはこんな豊かな職業がある、こんな起業家がいる、こんな人生の先輩がいる、こんな人たちと一緒に働きたいといった視点を持たせてやらないといけないと思う。高校生が、本物の起業家と出会えるような場や、多様な価値観に触れられるような機会づくり、PBLなど、いろいろな取組が、まだまだ工夫できると思う。これを1つの学科や1つの高校ではなく、府立高校全体で取り組まなくてはならないと思う。
- 中学生段階では将来の目標が明確に持てない生徒も多いが、中には自動車科で学びたい、農業に興味があるといった生徒もいる。府立高校にはそういう希望をかなえるための多くの専門学科があり、学校見学や体験を通して、自分の将来への希望を強くしたという中学生もたくさんいる。地域の産業などとも連携して、そこで学んで地域で就職したり、大学卒業後にまた地域の産業に携わろうと戻ってきたりというサイクルができれば、公立高校としての職業学科の魅力がより高まっていくと思う。
- 子どもたちが将来のことを考える時点で、職業学科に興味を持ってもらえるようなきっかけが必要である。職業学科の学びの内容、高度な技術力や施設・設備、学んでいる生徒の誇りなどを、もっと発信することが必要である。関心の無い多くの中学生は、自分から情報を得ようとはしないので、テレビなどのメディアの活用も含め、興味を持ってもらえるような仕組みや機会づくりというものが重要だと思う。
- 専門学科で学ぶ高校生に対しては、自分が住んでいる地域や学んでいる地域に一体どういった課題があるのかを理解し、その地域の将来を自分が支えていきたいというモチベーションが高まるような取組が重要であると思っている。例えば、今自分たちが学んでいることが将来どのように地域のために活かされるのかといった、学びのゴールを意識できるような取組が重要である。
- 毎年中学2年生を対象に、市長が学校に出向いて「ふるさと講義」をするという取組を行っている市もある。その中で、北部地域5市2町にどれだけ働くところがあるか、100人以上従業員がいる企業がどれだけあるか、みんながやりたいと思う仕事はほとんどこの5市2町の中にあるのではないかと話もしている。そのような、自分たちが住んでいる地域へ目を向けさせる取組というのも大切であると思う。

- 府立高校では、特色のある専門学科が充実していると思う。職業学科から大学に進学できるような工夫もされている。また、地域の情報を中学生・高校生たちに伝えていくことで、進路選択の幅も広がると思う。
- 職業学科で学ぶことで、その職業に関するスキルなどは身につくが、高校新卒者であれば基本給が安いという社会の実状がある。高校在学中の18歳で成人を迎えるようになる中で、実社会に出てからの状況や就業形態なども見据えた職業学科の在り方を検討すべきではないかと思う。
- 職業学科や特色ある専門学科については、遠方からの受け入れもできるような環境整備が必要である。寮の見直しなど、必要なところに手立てを打てれば、府の地域産業を支えるようなキャリア教育がより充実できると思う。
- 他県の商業高校では、フランスの職業バカロレアの試験手法を生かした取組を行った事例がある。この高校の生徒には、言われたことは成し遂げるが、自分で考えて判断して行動することが苦手であったり、検定試験の成果はあげているが、専門的な知識・技術を応用・活用する力が不足していたりという課題があったそうだ。そこで、実際の職業場面で必要とされるような具体的な状況の問題を出し、答えだけではなく、答えを出すプロセスや根拠も文章で書かせるという職業バカロレアの手法を授業に取り入れた。その結果、生徒の学習意欲や課題解決力が向上しただけでなく、資格・検定試験の合格率も向上した。職業学科では、専門的な知識・技能を身につけることも大事であるが、それを具体的な場面で活用できるようにならなければならない。これからICTの進展やグローバル化により、指示された業務だけを行うような人材ポストは減少していくと思う。知識・技能を持っているというだけでは、就職が厳しくなっていくことも予想される。これからは、専門的な知識・技能を身につけた即戦力としての人材を育成するというだけではなく、それを活用する思考力・判断力・表現力なども獲得し、高等教育機関に進学して将来のスペシャリストになる人材も養成することも必要な視点である。即戦力と将来のスペシャリストの両方の養成が、公立高校の職業教育が果たすべき役割だと考える。
- グローバル人材の育成に関して、近年国際バカロレア（IB）のプログラムが注目されている。日本国内の1条校では、6月末時点で53校あり、京都府の高校では私立1校、近隣府県の公立高校では、滋賀県と大阪府に1校ずつある。京都府立高校でもグローバル化の観点でIBの導入を検討することはよいと思うが、IBは民間のプログラムで、認定校としての認定料や、教員研修・資格取得などに係る費用負担が必要である。また、カリキュラムが、一定の動機を持った生徒を想定したものでレベルが高く万人向けではないことから、広く公立高校へ導

入することについては、慎重に検討すべきであるとも思う。

- 先般のアンケートによると、府立高校の定時制課程の生徒は、多様な学力レベルや生活スタイル、興味・関心に対応できるカリキュラムの提供を求めている。通信制課程の生徒も、ニーズはおそらく同様だと思う。目に見えにくい困難を抱えている生徒も一定数いることが予想されるので、定時制と通信制の生徒にアンケートをとってみてはどうか。生徒のさまざまな困難をすくいとり、それをカリキュラム上で支援するような定時制高校・通信制高校になれば、魅力が向上していくのではないかと思う。